

第 33 回電気通信普及財団賞 表彰者コメント ～テレコム社会科学賞～

< 順不同 >

※当論文賞受賞時の所属を記載しております。

田中 辰雄 氏（慶應義塾大学経済学部 准教授）

テレコム社会科学賞 奨励賞 「ネット炎上の研究」



この度は、名誉ある「第 33 回テレコム社会科学賞 奨励賞」をいただき、心より御礼申し上げます。本書は共著者の山口真一氏とともに、ネット上の炎上現象を実証的に分析したものです。インターネットが登場した時、ネットは人々のコミュニケーションを促して世の中を良くすると期待されていましたが、近年は懐疑論が強まっています。最近の若い人はネットではまともな議論や交流はできないと最初からあきらめているかのようです。このような残念な状態になった一つの理由が炎上現象にあり、その原因をつきとめてみたいというのが本書の執筆動機でした。

本書の最大の知見は、炎上で書き込んでいる人が実際はごく少数だという事実でしょう。炎上が起こると当事者は世界中から責められているかのように感じますが、実際に当事者を攻撃しているのは数人から数十人程度でしかありません。ほんの一握りの人のためにコミュニケーションが阻害されているとすれば、それは人間の本性の問題ではなく、ネットの設計の問題ととらえるべきです。ということは解決策もあるはずということになります。

本書は思いのほか多くの人の注目を集め、メディアでもとりあげていただきました。炎上現象は皆が気にしていた問題なのだとすることを再発見することになりました。今回「テレコム社会科学賞」をいただいたことで、問題の重要性を再認識し、さらに分析を深めていきたいと思っております。この度はありがとうございました。

寺田 麻佑 氏（国際基督教大学教養学部 准教授）

テレコム社会科学賞 奨励賞 「EU とドイツの情報通信法制—技術発展に即応した規制と制度の展開」



この度は、名誉ある「第 33 回テレコム社会科学賞 奨励賞」をいただき、身に余る光栄に存じます。審査してくださった先生方、電気通信普及財団のみなさまに心より厚く御礼申し上げます。

これまでの研究にあたっては、折に触れて、様々な先生方、先輩方から貴重なご教示を賜って参りました。これらの先生方、先輩方にも感謝の意を表するとともに、今後とも引き続きのご指導をお願い申し上げたいと思います。また、本書を KDDI 総合研究所叢書の 1 冊として出版する機会を与えて下さった KDDI 総合研究所のみなさまにも改めて感謝申し上げたいと思います。

本書においては、EU とドイツの事例を取り上げ、日進月歩の発展がみられる情報通信分野における規制と制度の変遷を EU とドイツがどのように行ってきたのか、また行おうとしているのかに関して、公法学の観点から、現時点における分析と検討を行い、我が国の情報通信分野における規制と制度について、今後の考えていくべき課題を示そうと試みました。

世の中の移り変わりは激しく、人工知能 (AI) の活用や自動走行、ドローンの利活用が問題となっています。このような中、情報と法に関する規制や制度の在り方や、それらに深くかかわる行政や行政組織の検討は、これからの私たちの生活に深くかかわることがらであり、今後ますます重要になっていくものと考えています。今回の受賞を励みとして、今後とも研究に邁進し、精進して参りたいと思います。

最後に、電気通信普及財団の益々のご発展とご繁栄を、心より祈念申し上げます。

村上 康二郎 氏（東京工科大学教養学環 准教授）

テレコム社会科学賞 奨励賞 「現代情報社会におけるプライバシー・個人情報の保護」



この度は、名誉ある「第 33 回テレコム社会科学賞 奨励賞」をいただき、心より光栄に存じます。審査をしていただいた先生方、および電気通信普及財団の皆様に深く御礼申し上げます。

本書は、現代の情報社会におけるプライバシー・個人情報保護の課題について、法学の観点から論じたもので、第 1 部と第 2 部から構成されています。第 1 部は基礎理論編として、情報プライバシー権の基礎理論について最近のアメリカの議論を参考にしながら論じています。第 2 部は応用編として、様々な先端的な情報技術が生じさせる課題や、プライバシー影響評価 (PIA) の課題について、学際的な観点から論じています。

プライバシー・個人情報保護の分野は、近年急速に発展しており、そのためどのようなタイミングで出版するのか、なかなか難しいところがありました。そのような状況において、我が国の個人情報保護法の改正が、自分の背中を押してくれました。このような大きな節目の時に、これまでの自分の研究成果を一回まとめておきたいということが本書出版の動機の一つということがいえます。

今回の受賞を励みに、今後もこの分野の発展に貢献できるような研究を継続していきたいと思えます。末筆ながら、貴財団の益々のご発展を心より祈念申し上げます。